

国会閉会・内閣改造のまぎわになって、死刑の執行がありました。

責任は誰がとるんですか？

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）
東京都荒川区南千住 1-5 9-6-3 0 2

1 1月30日の木曜日、死刑の執行がありました。処刑されたのは3人で、名古屋拘置所で2人、福岡拘置所で1人です。

1993年以降、法務省は毎年1～2回の死刑執行を欠かすことがありませんでしたが、もしかしたら今年には久しぶりに執行のない年になるかもしれないと期待されていました。

与党の一角を占める公明党が死刑反対を表明し、死刑に代わる刑罰制度を考える意味も含めて終身刑導入の是非をめぐる与党のプロジェクトチームが議論を進めていることなどが執行の停止に影響しているのだろうか、とも話されていたところでした。

しかし、法務省は執行を強行しました。

今回の執行が、国会が閉会になる前日で、内閣改造が迫っていたことをみると、執行のない年はずらぬ、執行にサインしない法務大臣を出さない、という官僚主導による執行だったことは明らかです。これは法務省による「計画殺人」以外のなにものでもありません。それでいて、執行の当日、抗議に赴いた死刑廃止議員連盟の国会議員たちの追及に対しては法務官僚は「大臣が決断したこと」と逃げてしまうのです。そしてこの日、法務大臣はとうとう議員の前に現われることはありませんでした。執行に対する責任はいったい誰がとるのでしょうか。

私たちは先月、元裁判官の方をお招きして小さな集まりを持ちました。そこで、多忙に追われ事件を精査する余力もなく、配転や昇給で差別されないかと最高裁の顔色をうかがいながら、前例を踏襲した判決を出し続けている裁判官の仕事ぶりの実態を知らされました。（その元裁判官の方は定年まで勤められた方ですが、最初の数年のあとはずっと刑事事件は担当させてもらえなかったそうです。）「忙しい」というのはもちろん誤判の言い訳にもなりません、そんな状況の中でとりかえしのつかない死刑という判決が出されていることにあらためて疑問を抱かずにおれませんでした。

また、私たちは処刑場を持つ東京拘置所に対して、執行しないよう申し入れてきました。刑務官自身も「なぜ、この人を今あえて処刑しなければならないのか」という疑問を抱きながらも与えられた職務として苦しい思いをしながら執行にたずさわっているのだと聞きます。

裁判官も、刑務官も、役人も、政治家も、誰ひとり執行への責任をとろうとしません。

1993年以降だけでも39名もの人たちが処刑されています。その中には、再審請求を出していた人、深く心を病んでいた人、下級審では無期懲役判決だった人、70歳にもなっていた人たちがいます。

「死刑」という極刑に、私たちは責任がとれるのでしょうか。